

仏 如来所以興出世 唯説弥陀本願海

年頭

「新年おめでとう。」 何度迎えても新年はおめでたい。すべてに物事の出発だという新しい爽やかな気分と、努力したいという緊張をおぼえるから。

底冷えのするような寒い元旦。

静かな静かな部屋の中に電灯が淡く光る。

若水を使つて、仏前に合掌。

読経すれば、み光、静かにゆらぎ、香の煙、乱れて昇る。

下駄をはいて外に出づれば、

地は凍つて足音ばかり遠くまで響く。

養專寺の御堂、本尊の前にぬかづけば、

天蓋の電灯、淡くもれて、立ちます仏体、暗く光る。

静かに合掌念仏すれば、

又一年生きのびさせられたる幸福を思う。

絶対他力によつて絶対に救われた者にとつては、

生きるということは報謝することである。

強いられた何物もない。

巨人の如く、高く大きく沈黙して坐せる鎮守の森の、

真暗い、そして急な石段を幾十百階、手探りに上つて、

村社、八幡神社の神前にひれ伏す。

ひしひしと日本人たる幸福を思う。

上ご皇室のご繁栄を奉祝する。

三千年来、相伝の祖先のご恩沢が私の全部である気がする。

雪花が散る。

時に午前四時。

午前四時と云えば、もう本村前原軍造氏のお墓には灯明が点つて、元旦の参拝がすまされた時である。この美しい祖先礼拝が始められてから今年で十年、一軒増し、二軒ふえ、今では数ヶ所の墓場に恩を知る者の姿が現れる。祖先の恩を忘れた者の家の栄えたためしがない。ほとんど滅亡に近かった本村の旧家、元木家に入つて養子となり、苦心惨憺、哀れ野原とならんとした庄屋の屋敷に、お家再興の志を貫徹した本村助役、元木十録氏の口から、「祖先の墓守」「祖先のご恩」祖先々と二口目には祖先が出る。

若水汲んで、用意された紙に書初めをする。

「至誠而不動者未之有也。」(孟子)

(至誠にして動かざる者は未だ之れあらざるなり。)

清書なら書き変えが出来る。人生の清書は書き替えが出来ない。

至誠！ 至誠！ 至誠の二字が人生全体解決の扉の鍵である。

いくら行つても、いくら考えても至誠が足らぬ。あつと気がつけば虚偽になつてい
る。虚偽になつたら他人を責めたい。

自分の心が誠でないという事は、誠に値がないということではない。

如何にかけひきの多い濁つた世の中でも、至誠の通らぬほど感じにぶくはない。

そうして、全ての至誠がそのまま受入れられ感じられるほど、清い人生ではない。

古来たくさん偉人は至誠に生ききろうとした。けれど彼等の真意は認められず
に、かえつて呪われて、流されもした、殺されもした。けれども彼らのついた鐘の音
は、彼等の死後に響き続いた。結局彼等は人類の恩人であつた。

全ての至誠から生れ出たことが、そのまま報いられる世の中であるなら、偉人も賢
人も聖者もないばかりか、裁判も、警察も、牢獄もいらなくなるであろう。

仏とは

どう考えても人生は、食うて着て寝て死ねばいいとは思われない。

飯を食つて箸が残る。山海の珍味に飽いでも要するに箸が残る。

麦飯に漬物を食つても要するに箸が残る。

もつと厳肅に考えた時、生れ出て、生きて行かねばならぬことは何のためか。

誰の頭えでも浮んで来る。

答えて曰く「仏になるために。」

人間から仏へ。

それが与えられた解答の全部である。

仏とは何か。

答えて曰く「覚者」(さとりをひらいた者)

更に詳しく言えば「さとり」とは、「自覚、覚他、覚行窮満」ということである。

もつと説明すれば、

自覚。自覚とは宇宙の真理を知りつくすことである。至高至徳の大人格を造りあ
げることである。過去未来現在に亙つての自分を知りつくすことである。考えるこ
とも為すことも、言うことも、善であり、真であり、美であつて、悪、偽、醜という
ことが一点もなくなつた釈迦如来の如き大人格を造りあげることである。これが自
覚である。

覚他。覚他とは自分の自覚のみにとまらず、全ての人にも等しく、めいめいの人
格を完成させるために努力してやることである。慈悲である。大慈大悲の大願をおこ
してそれに生ききることである。迷える人を救い、眠れる人に自覚を与えるのであ
る。

覚行窮満。自ら覚を開いて、全ての人に覚を開かしめるといふ大理想を完全に成就
することである。理想が実現されたことである。

結局、仏とは、宇宙の道理を知りつくし、慈悲の精神に生ききつて、三界は我が子と見え、あらゆる方法によって一切を救うことの出来るところの、絶対的智慧に裏づけられたる、慈悲に固まった大人格が仏である。

学問の深く出来た人を博士という。道德の立派に実行出来た人を聖人という。大事業の出来た人を英雄という。それと同じく、真理を知りつくし、慈悲に生ききつた人格を仏という。

西洋では、キリスト教の神の証明にたくさんな大哲学者が頭を痛めた。けれどかの大哲カントでさえ神の証明は完全には出来なかつた。人間をはなれ、宇宙を飛び出した神は永久に証明出来ぬかも知れない。

仏のあるなしについて証明にかかつた者は一人もない。

仏とは人間を離れてあるのではない。人間が仏になるのである。

人間が大修養をつめば仏になるのである。

「何のために生きるか？」

「仏になるために。」

それが人間に与えられた明かな答えである。

阿弥陀仏の誕生

釈迦如来が王舎城耆闍崛山にお出でになる時、そのお側には万二千の聖者たちが控えていられます。釈尊の従兄にあたらるる阿難尊者は、立つて恭しく合掌礼拝された後、第一にお問いになりました。

「私は常におつき申していますけれど、今日のようにお勝れ遊ばしたみ顔を拝んだことはありません。何が故にかかる尊きみ姿をせらるるのでございますか。」

釈尊は「お前の問いはまことによい。誰かがお前に教えたから問うのか。又はお前の考えか。」とお問いになりました。

阿難尊者は、「いいえ、私の考えからであります。」と申しますと、釈尊は、「善哉。

阿難よ、よく問うた。我が世に出でたゆえんは、一切の有情を救うためである。仏にあうことは億劫にも出来がたい。お前はよいことを問うた。我は今より、一切衆生のために甚だありがたい法を説く、諦らかに聞けよ。」と仰せになつて、阿難尊者に向つて大無量寿経をお説きになりました。

ずつとずつとその昔、久遠無量不可思議無央数劫のその昔、錠光如来という仏がお出ましになつて無量の衆生をお救いになりました。その次に出世の如来は光遠如来、それより後、月光、栴檀香、善山王、須彌天冠、須彌等曜、月色、正念、離垢、無著、龍天、夜光、安明頂、不動地、瑠璃妙華、瑠璃金色、金藏、焰光、焰根、地動、月像、日音、解脱華、莊嚴光明、海覺神通、水光、大香、離塵垢、捨厭意、寶焰、妙頂、勇立、功德持慧、蔽日月光、日月瑠璃光、無上瑠璃光、最上首、菩提華、月明、日光、華色王、水月光、除癡冥、度蓋行、淨信、善宿、威神、法慧、鸞音、師子音、龍音、処世と続き続いて、五十三仏がお出ましになりました。そうして最後にお出ましになつたのが世自在王如来でございます。

時に一人の沙門がありました。国王の位を棄て、仏法に帰し、名を法蔵と申しま
す。大變おえらい方でありました。ある時、世自在王如来のみ前に出でて合掌拝腕さ
れた後、長い長い讃歌をお唱えになつて仏に申されました。

「世尊よ。私も世尊と同じ正覚がとりたいと思います。私にどうかお教え下さいま
せ。私はあの生きとし生ける一切衆生のために正覚を成じ、迷える衆生の色々の苦し
みの本を扱いてやりたいと存じます。」

世自在王仏はこの願いを聞いて「それはまことに世に超えた願いである。たとえ大
海の潮をくみほして、底の宝を取るほどの大事業でも、至心で精進して行けば出来な
いことはない。」と申されました。法蔵菩薩のために、二百一十億の諸仏の国土を一々
ならべてお見せになりました。見おわつた法蔵菩薩はどうしたら迷いの衆生を救わ
れようと五劫の間お考えになりました。そうして世尊の前において考えて得た大理
想をお説きになりました。

一切の大衆を前にして、お述べになつた大願は実にかの四十八願でございます。

一、「設し我仏を得たらんに国に地獄餓鬼畜生あらば正覚をとらじ。」（無三惡趣願）

二、「設し我仏を得たらんに、国中の人天、寿終りて後、復三惡道に更らば正覚を取ら
じ。」（不更惡趣願）

十二、「設し我仏を得たらんに、光明能く限量ありて、下百千億那由他の諸仏の国を照
さざるに至らば正覚をとらじ。」（光明無量願）

十三、「設し我仏を得たらんに、寿命能く限りありて、下百千億那由他劫に至らば正覚
をとらじ。」（寿命無量願）

十八、「設し我仏を得たらんに十方の衆生、至心に信樂して、我国に生れんと欲し、乃
至十念せん。もし生れずんば正覚をとらじ、唯五逆と正法を誹謗せんをば除く。」
（念仏往生願）

十九、「設し我仏を得たらんに、十方の衆生、菩提心を發し、諸の功德を修し、至心に
發願して、我国に生れんと欲し、寿終る時に臨んで、たとえ大衆のために圍繞せられ
て、その人の前に現れずんば正覚をとらじ。」（諸行往生願。來迎引接願）

二十、「設し我仏を得たらんに、十方衆生、我名号を聞きて、念を我国に係けて、諸の
徳本を植え、至心に廻向して、我国に生れんと欲せん、果し遂げずんば正覚をとら
じ。」（至心廻向願。係念定生願）

五劫の思案は四十八願となつて次々と述べられたのであります。一々の願いは
皆、「設我得仏」（もし我仏を得たらんに）で始まっています。そうして「不取正覚」
（正覚を取らじ）でおわつています。

「設我得仏……不取正覚」四十八の願が皆、「仏となつても何々が出来ねば仏とい
う正覚は取らぬ」と、一々に重い責任がついております。正覚をお取りになることは
第一の目的ではありません。一々に盛られたお誓いの事実こそは目的なのでござい
ます。私に全てをお与え下さることが目的で、仏におなりになることは手段でありま

す。誓いは四十八通りに分れています。けれどもそれは、救つてやりたい、与えてやりたいの大悲大愛のみ心一つの表われであります。

法蔵菩薩は重ねて頌を以つてお説きになりました。

「我建超世願 必至無上道 斯願不満足 誓不成正覺……誓不成正覺……誓不成正覺……」と三度、満足に出来ねば誓つて正覺を取らじとお誓いになりました。

法蔵比丘がかくの如くお説きになるや、天地は六種に震動しました。天よりは美しい華を雨らし、空中よりは妙なる音楽が聞えます。法蔵比丘はいよいよ、この大願の成就に着手なさいました。

何という大祈祷でございました。大願でございました。苦行難行、不可思議兆載永劫の間、血みどろになつて、私故に、「たとえ身を諸々の苦毒の中に止くとも、我が行は精進にして、忍びて遂に悔いじ」と菩薩の無量の徳行を積植して下さつたのであります。

阿難尊者はお問いになりました。

「法蔵菩薩はすでに成仏していられますか。成仏して衆生済度はすみしましたか。未だ修業中で成仏せずにはいられますか。」

釈尊はお答えになりました。

「もはや成仏して、此を去ること十萬億土の西方の世界にいられる。その仏の世界を安樂という。衆生済度がすまぬ故に涅槃に入らずにそのままいられる。その仏、成道よりこのかた十劫を歴たまう。」と。

更に釈尊は詳しく仏の国土についてお説きになります。

「阿難よ、無量寿仏の威神光明は最尊第一にして諸仏の光明の及ぶところでない。東西南北上下の一切の国土を照らす。だから、無量寿仏をば、無量光仏とも無辺光仏とも、無対光仏とも、焰王光仏とも、清浄光仏とも、歡喜光仏とも、智慧光仏とも、不滅光仏とも、難思光仏とも、無称光仏とも、超日月光仏ともほめ奉る。……我は、この無量寿仏の光明の崇き不思議さを、たとえ一昼夜つづけて一劫説いても未だつくすことは出来ないぞ。」

「阿難よ、無量寿仏は長くても計ることは出来ないぞ。……西方の国土の大衆の数も知ることは出来ぬ。たとえあの目蓮が百千萬億那由他劫、長い間、初会の声聞、縁覚、菩薩の数をはかつたところで、それは、一本の毛を百にくだいて、その一分を大海につけて、ほんのわずかの水滴がついた位のことなのだ。」

かくして釈尊の説法は続いてゆきます。

阿弥陀仏の誕生、それは実に十劫の昔であります。長いと言えば長い昔、けれど又時の永劫に比ぶれば、ほんとにすぐこの間の御誕生であります。

久遠実相仏即十劫成道仏

阿弥陀如来は、十方三世諸仏の本師法王だそうであります。

仏にはもと二種のお体があります。法性法身と方便法身であります。

法性法身とは、『唯信抄』の「法性法身と申すは、色もなし、かたちもましまさず。しかればころもおよばず、ことばもたえたり。」の御言葉の如く、我々の考え及ばぬところであります。

全て目に見えるものは、色があり形があり、又は手触りを感じ、匂いを感じます。そうして出来たということがあるから無くなる時があります。生れたものは死にます。一時としてとどまるところなく、どんどんと変化して行きます。これを諸行無常と申します。この変化は時間ということを考えに入れられないでは考えることは出来ません。即ち私は過去と現在と未来ということを考えます。この過去未来現在ということを考えるから全てのこととは知れて来ます。

次に何事でも、原因ということがあつて、その因に縁のはたらきがあつて、結果が来るのであります。大豆は因で、太陽の光は縁で、実がなるのである。全ての事柄は皆、この、因、縁、果のこみいつた現れであります。この原因に縁が働いて結果が来る。果が又因になつて縁がはたらく、と、こんなになることを因縁法と申します。

それで私のごとく、生れたがあるから死ぬことのあるもの、即ち、相対的相対の世界に住んでいる者は、

時間、|| 過去、現在、未来

因縁法 || 因、縁、果

この二つを考えないでは何事も知ることは出来ないであります。けれどもこの時間と因縁によつて、出来たものは、皆亡ぶということがあつて未通つたものではない。絶対の価値というものはないのである。けれども時間と因縁によつて生れ出た私等は、時間と因縁によらねば何も知ることは出来ない。

ところが前に言つたように、仏のほんのお体は法性法身であります。法性法身即ち実相身は、

来るに來るところなく、去るに去るところなく、生(うまれる)なく滅(しぬる)なく、過去、現在、未来がない。色もなく、形もなく、生滅がなく、過去現在未来がないとすれば、如来は、前に申した時間と因縁法を超越したものであつて、私たちにはわからぬものであります。

しかるに釈尊は私たちにわかるように、現に西方にまします阿弥陀如来をお説きになつて私たちに知らせていられます。あの十劫成道の四十八願成就のみ仏は即ち方便法身であります。親鸞様は和讃に申されました。

「弥陀成仏のこのかたは いまに十劫とときたれど

塵点久遠劫よりも ひさしき仏とみえたまう」

即ち、法性法身の常住実相の如来は、衆生済度の方便のために、一如(実相)より形をあらわして、法蔵比丘となりたまひ、不可思議の四十八の本願を誓ひ、十劫正覚の弥陀とおなり下さつたのであります。即ち、時間と空間、因縁法にのりかかつて出て下さつたのです。時間と因縁をなくしては何事も知り得ない私のために、時間空間因縁法に従つて生れ出でて下さつたのが、南無阿弥陀仏であります。

けれども、時間と因縁によつて出来たものは、出来たということがあるから亡ばねばなりません。では弥陀如来もお亡びになるでしょうか。ここまで来ると私たちは

驚嘆せずにはいられませぬ。前にかかげた四十八願中の、第十二願と、第十三願を今一度お読み下さいませ。

第十二願、光明無量。

第十三願、寿命無量。

光明は無量で至らぬ限もない。即ち空間から考えた時、絶対であります。又時間から考えた時、寿命無量であります。死することなき永遠の生命であります。時間、空間、因縁と、どこまでも相對規範に従いながら、よく法性法身を全うせられてあります。

では、仏には、法性法身と方便法身と、異つた二様の仏がいられるかと申しますと、決して別なる二つのものではありません。法性法身によつて方便法身はお出来になり、方便法身によつて法性法身をおあらわしになるので、この二つは異つてゐるけれど分つことは出来ませぬ、一つではあるけれど同じではないのであります。ただ味わうより外ないのであります。

阿弥陀如来は方便法身であります。けれどもそれは久遠一如の真証に即した方便法身であります。どこまでも、かの四十八の本願に酬い、衆生を濟度せんがために、対者によつて變化して、形となつて表われて下さつたのが、かの阿弥陀仏であります。久遠実相の如来のお力は、十劫成道の阿弥陀仏のままによつて出され、久遠仏のままが十劫成道の方便仏のお働きをなさるのであります。

されば法性法身のままが方便法身であり、方便法身のままが法性法身であります。(この章幾度もお読み下さいませ)

7

高級なる神秘

お稻荷さんとか、一畑さんとかに願をかけたたり、手品師がしそつなつたらぬ程度の低い、言いかえると低級な不思議を信ずるほどの迷信家になつてもなりません。

けれども又人間の力を信じすぎて、一切のことはみな人間の頭でわかんと思つても、高慢になつてもなりません。

人間に涙というもののある間、神秘の扉は永遠に閉ざされています。

高級な神秘からは、高級な宗教が生れます。

低級なる神秘からは迷信が生れます。

高級なる神秘とは、学問が進めば進むだけ承認めねばならぬ神秘です。

何時の時代でも必要な神秘です。

如何なる人にも妥当であり、信ずることの出来る神秘であります。

高級なる神秘は、その裏に深い深い思想哲学を背景に持っています。

如来は人間を離れてあるのではなく、人間の中にあられ、最高なる智慧と慈悲の統一された大人格であります。

もしこれを信ずることが出来ねば私自身すら信ずることは出来ませぬ。

私は言いました。

「人間は仏になるために生れて来た」と。

けれども私たちは、久遠の業苦に悩み、傷ついた迷える者であります。貪欲と瞋恚と愚痴以外に何も考え得ないで、微塵も人間（仏となるべき者としての）としての誇りのない者であります。今日の愛は明日の呪いに変わり、昨日の親切は今日の自慢の種であり、去年の努力は本年の愚痴で消えている私たちです。

けれどもそこには、久遠実成の仏の本願力が出来、本願力を具体化せられたところの十劫成道の阿弥陀仏の誕生があつたのであります。

何という高級な神秘でしょう。

親鸞聖人様は、唯々簡単に、

「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念仏申さんとおもひたつところのおこる時、すなはち撰取不捨の利益にあづけしめたまうなり。」

とお教え下さいました。一文不知の凡夫でも、南無阿弥陀仏と信じて称える者は最上の智者であります。（ただ不思議と信ずるところ、その裏には深遠な大乘哲学がふくまれ、汎神論に立つた形而上学が知らされています。）

様々に理論の遊戯をいたしました。唯々、このままが、このままでありながら成仏の約束されたことを信じて、大地の上に力強く立つことです。

一味の喜び

平等一味のあじわい。

山の中のお婆さんのよろこびも、都会に住む学生の信心も、与えられたものだから8 変わりはない。法然上人も信不退のみ座につかせられ、親鸞聖人も信不退のみ座につかせられる。私も如来によつて救われるし、人を殺した山田憲氏も如来によつて救われた。医学博士文学博士富士川游氏の信仰も、甚四郎の信仰も一味である。

1+1=1という不思議な式がエマーソンによつて示された。二人が融け合つても一人である。三人五人千人寄つても一人となる。

1-1=1

という不思議な式がピタゴラスによつて示される。人間の小さい功利的なソロバンののはじき方ではとけない。一から一を引いても一が残り、一に一たしても一になる。同じことを言いかえただけである。全ての自力、わしがわしがの我を棄てて、我を棄てて、生死の大問題をば全て仏にまかせきつて、自力で、わしがで、生きられるのだという迷妄からさめて、何でもかでも、自力のはからいを棄ててしまふ。そうして全体（即ち如来）のはからいにまかせて生きてゆく。この無我の仰信の人ばかりが集まつた時、人は何人いても一人である。

自分にも善が出来るとか、悪いことをしたことがないとか、そんななまぬるいうぬぼれ（自分にほれること）や、自慢をはきすてて、絶対他力の水につかつていることに感謝する者のよろこびは、二人集まつてとりだして喜んでいても、五人よつて話してみても、平等一味のよろこびである。

若い内にほんとの信仰に入ろう。

年老つて寺の踏段がすれてなくなるほど参つたとてなかなかわかりません。

年を老つての信仰は、この世も、自分もなげておいて、手を未来にのぼして、極楽参りを握りたくなる。信心という別仕立の自力をつかみたくなる。そんなことでは喜んだとて自力の迷いの喜びである。

貪欲の冷き荒波にも、瞋恚の燃え上る火の河にも、ビクともしない無碍白道の味は出て来ない。

「名号不思議の海水は

逆謗の屍骸もとゞまらず

衆悪の万川帰しぬれば

功德のうしほに一味なり」

「尽十方無碍光の

大悲大願の海水に

煩惱の衆流帰しぬれば

智慧のうしほに一味なり」

人間の道徳的善悪の如きは、山のように燃え上った火の中に、淡雪の降りこむ位のことなのだ。川幅何十里の揚子江の流れに、十悪五逆の木の葉がおちたとて、何で川の水がせかれよう。濁っていようが清かろうが、衆悪の万川が流れこめば全て青く澄んだ功德大海のうしほに一味となる。

何々修養とかの書物で、線香花火のようにパツとはなやかに酔うたとて、胸の空虚をどうするのだ。わしが、わしがで、自力の善を積みたいたいとあせらずに、善か悪かは知らねどもただ有難さの心やるせなく、無事な体で出来ることなら、報謝のために働かせてもらう。これこそ無私の生活である。

真人格の活動がここから生れる。

人間性に立脚して

悪いことをしないのは悪いことをする縁にふれないのです。縁にふれたら皆悪いことをします。

桜の木に、太陽の光と、水と、土とを与えたら大きく成長します。それらの縁が都合よければよいほど大きくなって、八重の美しい花を咲かせます。縁にふれて出て来るものは、決して梅でも椿でもなくて要するに八重桜の花であります。桜の花が咲かないのはまだ縁にふれないからです。要するに桜から桜の花が出るだけです。

人間とは愛欲の海に溺れる者の別名です。愛欲に溺れたことのないという者は、自分を正しい者として誇っています。けれどもそれは溺れる機会がないのです。縁の働きがなかったのです。

私は縁にふれないために小さき自分を見て誇っている人よりも、人間性を赤裸々に味わって泣いている人の方をなつかしく思います。と言って悪の奨励ではない。

夜の町を歩きますと、誰もが、美しく装って歩いていきます。心をも体をも。けれどそれらの人が皆、涙の半面、恥しい半面を出さないうで、美しくしかも平気らしく装っていることを知る時、涙ぐましいなつかしさを思います。それが人間の道徳でもあることを思う時、人間のいじらしさを思います。

權威のあるお方、厳しそうなお方の前に出た時、女は皆、習いおぼえた作法を使つて型のように典雅に、静かに立ったり坐ったりします。それが地上の奥ゆかしい仕方でもあるのです。けれどもその時の態度には、至るところに不安と窮屈がついています。言うことも装われた、飾られたことばかりです。そこには飾られたものと飾られたものとのねあいがあるばかりです。一段上から見たら虚偽であります。

人間が年をとればとるだけ装うことが上手になります。人間は厳しく装つた人をもすれば聖者の如く拝もうとします。恐しい偶像崇拜に墮落した人たちであります。

装つて拝せようとする者は巧に台詞を使います。彼は悪魔であります。自分は知らなくても後尾が見えています。

この悪魔と愚かな偶像崇拜者が集ると、そこには光明のおおわれた暗黒世界が出来ます。このいやな空気が時には宗教とか信仰とかの名がつけられることさえあります。

如何なる大博士でも女に溺れて妻子さえ棄てて走り去られます。子供が死んだ時には、現実主義とか物質主義とかの哲学者もお泣きになります。舌三寸、天下の世論を動かす大政治家も、奥様の前では子猫のようなこともあります。時の宗教界では菩薩のように尊ばれる方でも、静かなる夕べ、恋する少女のために吐息せられます。徹底的に申します。地上には聖者（善に生ききるという意味で）はいませぬ。

溺れることをつつみかくして、ツンとすまして、清そうにしようとする心、その心が救われない心です。

溺れる自分を、もがきながらも、どうすることも出来ないで、泣いている方こそ、なつかしい私の崇拜したい方なのです。私は溺れることをすすめるのでも、賛成するのでもありません。そして又責めようとは思いません。ただ一緒に泣きたいと思いません。

私は、私たちのこの団体を、飾り装つた者と者との乾からびたものの集りとはしたくありません。

人間性の赤裸々の上に立つて、ただみ仏にはからわるるままに、少しでも清く生きたいと思います。

女は夫の前では、汚い醜い自分を赤裸々にさらけ出します。それを単純な目で見てはなりません。そこには飾らざる者のより真実が見えます。

欠点でも、弱点でも、美点でも、長所でも、知りつくすことによつてほんとの愛は湧いて来ます。

女の長所をのみ見て愛そうとしたり、夫のいいところのみを見て愛そうとするのはほんとの愛ではありませぬ。悪いところ、嫌なところを知りつくして、そこにこそ自分をなげこんで、労りもし、慰めもし、励ましもするところに、ほんとの愛はあるのです。

例の短気を夫がおこす、うたれるままに忍ぶ時、たたかれてもうたれても痛くない妻の愛情があるのです。

悲しいことには、夫には才がない、労力がない。そうした出世のなさそうな夫をこそ、男の才のありだけで安住が出来るようにするのこそ、ほんとの愛でありましよう。

泣きながら口汚く夫を罵り続けている妻の側で、黙つて煙草をふかしている男をみます。妻は自分の悪い性格に（悪いとは知りつつ）苦しんでいるのです。その苦しむのをこそ可愛そうに思っているのでしょうか。

厳かに装い、權威という甲冑を着た人の前では、泣くことは出来ません。悲しい人間性を経験しつくした人の前でだけ、心おきなく泣くことが出来ます。

十二月三十一日の夜、おばあさんは夕方から親類に行きました。久子（おばあさんの子）も私の夕食を出しておいて行きました。忙しく仕事していた私は、初めて、一年の最後の夜だなと思ひました。そうして食膳につきましました。最後の夜の晩餐、一年の苦闘はあまりに長かつたなあと思ひながら、食事しようと思ひました。ああ、しかるに何が私の年越しのねぎらいでしたでしょうか。そこにはただネギのお汁があつたばかりです。「世界十五億が最終の夜私におくる食事なのか」と思つた時、私はたつた一人で泣いてしまいました。十分二十分どうしても箸がとれませぬ。お炬燵の上にあぐらをかいて、泣きながら続けざまにみ名をよんでいました。こうした私ではなかつたはずです。念仏を称えてじつと考えました。印度のガンジーのことを思ひました。貧しい人のことを思ひました。獄の中の罪人を思ひました。涙ながらにも合掌して箸を取りました。

私はさるところで、光明の同胞に向つて、その方が食事の不服を言つたから、「食事についてかれこれ言う者は大人物ではない。」とソクラテスの例をひきつつ説教したことを思い出して、矢も盾もたまらず、食後すぐおわびの手紙を差出しました。その方からこんな手紙が来ました。「先生が食事に小言をいう人物は大きな人物じゃないと仰しやつた時の先生（多くの皆様はこの時の先生に敬服していると思えば寂しくありません。）より、私は、呪わしい気分におなりなされた（最後の晩餐に）そして泣かれた涙の先生、それこそ真に尊いと私は思ひます。そしてその先生が（敬虔なとも名づけたくない）淋しい先生が、ほんとに懐しいのです。その法兄を私の兄様とします。その兄様を通してのみ、真の先生の価値を見出します。それを世間の人は、食事に泣く先生を悪いと言うかも知れませぬ。気ままものと言うかも知れませぬ。でも私は、そこにおいて（説教の先生でなくて）念仏の子は抱きあいたいと思ひます。」

そのお手紙の一節です。私はほんとに内心の批判なくして説教することのどんなにつまらぬことであるかを知りました。そうして熱烈ならんとして熱烈になり得ず、超越しようとして超越し得ぬ私こそ、痛み悲しむ人と共に泣き得るのだと痛感いたしました。

私は他所行きの装いで人様に拝まれようとは思いません。どこまでも人間性の淋しさを共に泣いてほしいと思います。私には来る年毎に人の世の涙の世界が知られて来ます。私が若い時考えていた世界は、もつと清いけれど、単調な、机上の空論的なものでした。

消息

十二月九日、十日両日、山県郡加計町津波に支部が出来たので、講演にまいりました。津波校の小林校長様、宮庄先生、その他、諸兄姉の御尽力で、一ヶ月の間に三十何人の同朋が出来る。若い方のみ切れば血の出る信仰に目覚めて下さる。

十二月十七日、飯室村在郷軍人分会のお招きによつて「宗教上より見たる現代文化の批判」の題下に、午前と午後三時間の講演をしました。難しいことの下手の長談義で恐縮。

十二月二十五日、広島済世軍支部でお話させて下さる。かねてからお会いしたかった福井様にお目にあたる。田川様、坪井様、前田様、その他、新しい方にたくさんお目にあたる。

一月二日、大雪。大雪の中を小河内村に向つて出発する。路が開いていない。吹雪がする。小浜まで行く。花岡様の出迎えにあう。お宅でぬれた服を乾かさせてもらう。中山校長、藤田里子先生、花岡様などの熱心な御宣伝で村中来て下さるはずの会が大雪で試練を受ける。集った方はよりすぐった方の御集り。あまり寒いので私の話にもちつとも熱がない。夜、皆様の話一決、藤田先生の内に集る。里子様の御姉様の米代様は信仰に生ききった方で前から御名前だけ知っていたのが、今日の会で御知り合いになる。六、七人の方と一時、二時、三時、とうとう雞の鳴くまで語り続ける。

毎月一回会合する約束が出来る。

一月十四日鹿島市京橋川以東を区域として広島支部が出来る。十四日昼が発会式、夜は四名の死亡したまえる兄姉の追弔の式が営まれる。会場は新多門の説教所、中本信海師、森田一枝様の御発起、西川様その他広島支部の熱心な方々のみ手によつて根強く生れることであろう。私も出席してお話しさせていただきます。

二月十八日、(旧正月三日) 鈴張村長覚寺に来て話せとのこと、鈴張村の諸兄姉のお集り、御世話を是非御願ひいたします。

やつとの思いで、振替に入りました。以後は何卒御利用下さい。御無理には申しませんけれど、どうぞ、月十銭の団費を御恵み下さいませ。お一人では僅かですけれど、たくさん集ると一ヶ月年三百円の不足となつて表われます。

求められる方に、他の熱心な方を紹介すると、見知らぬ方の間になつかしいお便りが念仏をのせて往復する。こんななつかしい姉様、こんな親切な兄様がと、お互いに

ありがたいと喜ばれる。どうかお互いに音信して下さいませ。そうしてお互いに慰め、励まして修養いたしましょう。

もし同胞の方で死亡なさった方があつた時には、その近所の方は出来るだけ多く会葬してお上げなさいませ。そして誰でも本部に、死亡の月日と、その方の父兄の御名と、法名と、お所を知らせて下さいませ。ただし死亡せられた後の営み十回よりも、生きていらつしやる時、病床に一回でも訪れてお慰めすることが意義が深い。